

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：特定領域研究
 研究期間：2005～2009
 課題番号：17063006
 研究課題名（和文） 「シュメール文字文明」の成立と展開
 研究課題名（英文） Civilization of the Sumerian Writing System: Formation and Diffusion

研究代表者

前川 和也 (NAEKAWA KAZUYA)
 国土館大学・21世紀アジア学部・教授
 研究者番号：60027547

研究成果の概要（和文）：前4千年紀末にメソポタミア南部で成立したシュメール文字記録システムが、遅くとも前3千年紀中葉にはシリア各地で受け入れられ、シリア・メソポタミア世界が一体化した（「シュメール文字」文明）。アッカド語などセム系言語を話す人々も膠着語であるシュメール語彙や音節文字を容易に利用できたのである。本研究は、「シュメール文字」文明の展開過程、またセム諸民族がこれを用いてどのように社会システムやイデオロギーを表現しようとしたかを考究した。

研究成果の概要（英文）：The Sumerian writing system, invented in the last period of the 4th millennium BC, was fully accepted by the Semitic peoples in northern Mesopotamia and Syria in the middle of the 3rd millennium BC at the latest. Thus we have defined the Syro-Mesopotamian civilization as the “civilization of the Sumerian writing system.” The following topics have been studied in this research project: 1) the formation and diffusion of the Sumerian writing system, 2) the social system and the political ideology of the Semitic peoples as seen in the Syro-Mesopotamian cuneiform documents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
17年度	4,700,000	0	4,700,000
18年度	4,700,000	0	4,700,000
19年度	4,700,000	0	4,700,000
20年度	4,800,000	0	4,800,000
21年度	4,000,000	0	4,000,000
総計	22,900,000	0	22,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：シュメール、文字記録システム、シリア、セム、メソポタミア

1. 研究開始当初の背景

本研究は特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総

合研究」（代表者大沼克彦）を構成する1計画研究として出発した。シュメール語・アッカド語粘土板文書の解析を専門職とする

我々が、シリア・メソポタミア遺跡の考古学研究者だけでなく、古動物・植物学、形質人類学あるいは地質学研究者と共同しつつ、前3千年紀、2千年紀のセム系社会システムを考察しようとしたのである。

2. 研究の目的

研究グループ発足にあたって、我々は以下のような研究目的・課題を定めた。(1)「シュメール文字」文明の成立と展開、すなわちシュメール文字を用いる粘土板記録システムの成立とシリアへの普及過程の考察。

(2) シリア・メソポタミアの一体化。(3) 粘土板テキストにみえるセム系諸民族の社会システムと政治イデオロギー。(4) シリア・メソポタミア都市社会からみた牧民社会。

(5) シュメール語とセム諸語の言語接触の過程とその結果。(6) シリア・メソポタミア遺跡発掘への参加と発掘成果・知見を課題(3)、(4)に応用すること。

3. 研究の方法

シリア・メソポタミア地方から出土した粘土板文書分析が本研究の中核をなした。したがって粘土板文書出版、研究書購入に予算出費の大半が充当されている。連携研究者、研究協力者がガーナム・アル・アリ遺跡発掘に参加し、またイラン国立博物館蔵粘土板文書調査も本研究期間の後半で実施された。

4. 研究成果

本研究が生んだ成果を以下のように列挙することができる。(1) シュメール文字を用いる記録システムの成立と展開にあたって決定的役割をはたした「辞書リスト」の詳細な分析が前川によって実施された。(2) 前3千年紀シリア・メソポタミア地方におけるウマ科動物の呼称体系が前川によって明らかにされた。世界ではじめての成果であり、またシリア・メソポタミア世界がいかに一体化していたかの証でもあった。(3) 「シュメール文字」文明は西方シリアに展開しただけでなく、東のイラン地方にも拡大した。この結果、前3千年紀後半にはさらに東方のインダス文明地域とシリア・メソポタミアとの文化接触も進展したことが明らかにされた

(前川、森)。(4) イラン国立博物館(テヘラン)所蔵粘土板調査(森、松島)。これによって将来の本格調査への道が開かれた。

(5) メソポタミア都市社会がもつ周辺民族観、差別意識の構造の解明(前田)。前田はこのような「蛮族侵入史観」が前2千年紀冒頭になって形成されたことを西欧アッシリア学界にさきがけて立証した。(6) シュメール語とアッカド語の相互交渉。森は主としてシュメール動詞組織から、松島はアッカド語文におけるシュメール語彙の解釈利用の視点から、この問題を論じた。(7) セム民族の刑罰観の解明(依田)。(8) シュメール、バビロニアの王権観の解明(前田、前川)。前田は2千年紀前半セム系アムル人のメソポタミアへの移住定着にさいして「族長制」がはじめて制度化されることを論じ、いっぽう前川はハンムラビ法典碑にみえる「棒と輪」の起源を論じた。「棒」の起源をシュメールの「祭儀シンボル」に、「輪」を東方(?)世界の異民族支配のシンボルに求める前川の考えは世界初の結論であり、今後学界におおきな論議をよびおこすであろう。(9) 共同研究会「シリア・メソポタミアの文化接触：民族・文化・言語」の開催(平成20年1月)、成果刊行。シリア・メソポタミア世界のなかでの相互交流をさまざまな視点から議論した。とりわけ前2千年紀前半のマリ文書研究者を招へいし、セム系僕民の定住化を本格的に議論することができたのは、大成功であった。またこれは「セム系部族社会の形成」のいくつかの研究班に属する楔形文字研究者を横断的に組織した集会であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計55件)

W. Mori, "Notes on the plural bases in Sumerian," L. Kogan et al. (eds.), *An International Annual of Ancient Near Eastern, Old Testament and Semitic Studies: Proceedings of RAI 53* (in press, Moscow).

K. Maekawa, "Rod and ring: Insignias of

foreign rule in the Ur III-and OB periods”, Al-Rafidan Special Issue (2010, Kokushikan University), 215-230.

T. Maeda, “Gilgamesh and Agga: A heroic story,” Orient 42 (2010), 61-66.

E. Matsushima, “Quelques notes sur l'épisodes des “cinquante nomes de Marduk,” X. Faivre et al. (eds.), Et il y eut un espri dans l'Homme (2009, Paris), 55-64.

E. Matsushima, “La lumière et le ténébres dans les mythes mésopotamiens,” T. Shinoda (ed.) Mythes, Symboles, Langues II (2009, Nagoya), 55-62.

前川和也、森若葉「初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルハ」『ニューズレター』(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」No. 11 (2008), 14-23。

前川和也「前3千年紀メソポタミア、シリアのイエロバとノロバ：再考」『西アジア考古学』7号(2006), 1-19。

前田徹「メソポタミアにおける統一王国と異民族の侵入：蛮族侵入史観再考」『西洋史論叢』28号(2006), 1-13。

前川和也「麦が実った後に(2) : garadin 考」『西南アジア研究』62号(2005), 1-23。

前川和也「マルトゥウの結婚」によせて」『ニューズレター』(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」No. 2 (2005), 14-21。

[学会発表] (計7件)

K. Maekawa, “Rod and Ring: Insignias of foreign rule in the Ur III OB periods” (文部科学省科学研究費補助金特定研究「セム系部族社会の形成」平成21年度国際シンポジウム) (2009年11月、サンシャインシティー文化会館)。

K. Maekawa and W. Mori, “Dilmun, Magan,

and Meluhha in early Mesopotamian history” (Cultural Relations between the Indus Valley and the Iranian Plateau during the Third Millennium BC) (June 2008, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto).

E. Matsushima, “Ancient Iran and Mesopotamia: a brief sketch of a reciprocal history” (National Museum of Iran) (September 2008, Teheran).

W. Mori, “Notes on the plural bases in Sumerian” (53e Rencontre Assyriologique Internationale) (July 2007, Moscow).

前田徹「シュメール：最古の都市文明」(平成17年度就実大学公開学術講演会) (2005年12月、就実大学)。

[図書] (計7件)

前川和也(編)『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」計画研究「シュメール文字文明」の形成と展開」平成17-21年度研究成果報告(2010)、1-108。

前川和也(編)『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成20年度研究集会報告 シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語」1-124。

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 和也 (MAEKAWA KAZUYA)
国士舘大学・21世紀アジア学部・教授
研究者番号：60027547

(2) 研究分担者

前田 徹 (MAEDA TOHRU)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80116665

(H20～H21：連携研究者)

依田 泉(YODA IZUMI)
常磐大学・国際学部・教授
研究者番号：40285747
(H20～H21：連携研究者)

森 若葉 (MORI WAKAHA)
総合地球環境学研究所・フロンティア外上級研究員
研究者番号：80419457
(H20～H21：連携研究者)

(3)連携研究者

松島英子 (MATHUSHIMA EIKO)
法政大学・キャリアデザイン学部・教授
研究者番号：90157305